

第 4 回アジア・オセアニア小児神経外科学会学術総会 (AASPN) 参加報告記

国際医療福祉大学医学部脳神経外科

下地 一彰

昨年 12 月 13 日から 15 日の期間で第 4 回アジア・オセアニア小児神経外科学会学術総会: The 4th Congress of Asian-Australasian Society for Pediatric Neurosurgery (AASPN) が開催されました。

白根会長に事務局長として関わるように仰せつかり、埜中先生、朴先生とともに学会の運営に関わることができました。白根・師田両会長のエネルギーな準備にあまり事務局長として役に立つことはできませんでしたが、国際学会を裏方から運営することに関われたことはとても有意義な経験でした。JSPN 国際委員会をはじめ、ご参加いただきご支援を賜った会員の先生方に深謝申し上げます。アジア・オセアニア地域は広大な広さであり、経済レベルも、歴史的背景も異なり今回は色々考えさせられることがたくさんありました。200 万人生まれていた赤ちゃんも 75 万人しか生まれなくなった本邦の小児脳神経外科は転換点を迎えていると思います。アジア・オセアニアの仲間と協力をしながらこの広大な地域の子どものためできることを模索し、そのためにより相手の国の背景、医療のレベルなどを考慮した対応が必要であることを強く認識しました。

さて、20 数年前の自分を思い返すと絶対に参加しないような国家試験を間近に控えた時期に国際医療福祉大学の 6 年生が数名運営に関わってくださいました。皆脳神経外科に興味を持ってくださり、自ら手を挙げて各国の小児脳神経外科の病院に見学の数週間に出ています。見事 2 年連続全国 2 位の成績で国家試験をクリアした後に本学会の参加レポートを書いていただきました。会員の皆様におかれましてはどこかで IUHW 出身の研修医にお目にかかる機会があると思いますが、新設の我々の宝とも言える若い意欲のある彼らに是非お声がけいただき研鑽の手助けをお願いいたします。

八塩 知樹先生

(Alder Hey Children's Hospital, Liverpool (Conor Mallucci 教授) で病院実習

さいたま市立医療センターで初期研修)

昨年、本学の下地先生のご協力のもとイギリスへの留学以来、小児脳外科に対する興味が高まりました。AASPN の学会では、多岐にわたるセッションに参加し、イギリスで学んだ手技や症例、手術に関する発表を聞くことができ、非常に有益な経験となりました。国によって治療法やアプローチが異なることを実感し、国際的な視野を広げる良い機会となりました。

学会では通常はお目にかかれない先生方との交流ができ、医学生として貴重な刺激を受けました。彼らの経験や知識に触れ、専門的な視点からのアドバイスを受けることで、将来の医師としての方向性についての洞察が深まりました。

さらに、運営のお手伝いをする中で、普段ではなかなか経験できないトラブルに遭遇しました。しかし、その対処過程を運営サイドとして体験し、国内の学会だけでなく国際的

学会においても事前のコミュニケーションや相手への尊重の心など基本的な要素が大切であると改めて実感しました。

総じて、AASPN の学会参加は小児脳外科における専門的な知識の向上だけでなく、異なる文化や医療体系との交流を通じて、広範なスキルや視野を身につける良い機会となりました。今後もこのような国際的な学会への参加を通して、より広い視野をもつ医師に成長していきたいと考えています。

迫田菜々子先生

(Lurie Children's Hospital of Chicago (Sandi K. Lam 教授) で病院実習
順天堂大学医学部附属順天堂医院で初期研修)

今回、本学の小児神経外科教授である下地先生のご招待を受け、Asian-Australasian Society for Pediatric Neurosurgery (AASPN) というアジアとオーストラリア地区の小児神経外科の発展を目指す学会に参加しました。今年度の AASPN では、アジア・オーストラリアだけでなく、世界各国から著名な先生方をゲストに迎え、先天異常や脳腫瘍、脳血管疾患、水頭症などの各分野において、疾患についての基礎的な知識や治療法から最新の治療器具に至るまで幅広い内容の発表を聞くことができました。

初めての国際学会への参加は新鮮であり、特に印象的に感じたことは、国際学会に参加し異なる国々の治療法や疾患への見解を知ること、常に日本のガイドラインを当たり前だと考えず、その改善の余地や疑問を見つける貴重な機会を得ることができると感じたことです。

また、英語を用いた議論や質疑応答において、言語能力だけでなく、ニュアンスを伝えるための応用力が求められ、高い英語レベルが必要であることを痛感しました。会場の公用語は英語でしたが、全ての先生方が親しみやすくお話をされており、症例の話になると患者さんへの思いやりが感じられ、小児神経外科の先生方の連帯感と思いやりの心にも科への魅力を感じました。

この 4 月から初期研修医としての医師人生が始まりますが、AASPN で小児神経外科の最先端の治療や経験豊富な先生方の考え方に触れ、患者さんや医学にどう向き合えば良いかを考える有意義な機会となりました。これからもこの刺激を心に留め、日々の研鑽を積んでいきたいと思えます。

萩野陽菜乃先生

(Hospital Femme Meru Enfant (Federico Di Rocco 教授)で病院実習
武蔵野赤十字病院で初期研修)

下地先生をはじめ、運営の方々、そして各国の先生方に、この貴重な機会をいただけたことに心から感謝申し上げます。

まず何より、様々な言語が飛び交う会場に圧倒されました。そして、世界でご活躍されている先生方とお話しできてとても刺激的な空間でした。

下地先生と受け入れ先の先生方のご厚意で、5年生の4月にフランスとイタリアの病院で小児脳外科の手術を見学する機会をいただきました。学会の内容は専門的な内容が多く、全てを理解することはできなかつたのですが、実際に見学したVPシャントや頭蓋縫合早期不全症に関するご講演を聞くことができ、大変興味深く、勉強になることばかりでした。また、自分の国では当たり前の医療機器も他の国では異なるもので代替されているなど、質疑応答の内容もとても興味深かつたです。

さらに、学会後の食事の場で印象的かつたのは、若い先生方もとても活発に交流している点でした。何不自由なく英語でコミュニケーションを取られている先生方を拝見し、自分もバランスよく英語のコミュニケーションスキルを伸ばさないといけないな、と痛感しました。

この貴重な経験を無駄にしないよう、広い視野を持ち、初期研修も一生懸命患者さんと向き合い、研鑽を積みたいと考えています。重ねて感謝申し上げます。

